

1. 最終処分場の安定化について

近年の管理型最終処分場は、大部分がシート遮水工ですが、廃棄物の大半が無機的な性状のものとなっている現在、シートに囲まれた閉鎖的環境の中で、土壌や微生物の作用にも期待している、「安定化」は従来からの定説どおり本当に埋立地の内部で実現するのでしょうか、実現しているのでしょうか？

2. 産業廃棄物・最終処分場の 3 種類の構造分類について

山田・井上両先生のコメントにもあるように、産業廃棄物（燃え殻、ばいじん、汚泥、紙くず等）は発生時点では均質な廃棄物のはずですが、管理型最終処分場では多くの異種類の廃棄物と一緒に、他の雑多な廃棄物と混合され、分別も難しい制御困難な物質に変わってしまうので、最終処分場を安定・管理・遮断の 3 類型に限定せず、もう少し種類を増やして、同一種類の（紙くずと繊維くず）ばかりを対象にした埋立地を設けたら、最終処分場での対応が遥かに容易になるのではないかと考えるのですが。

3. 安全性の評価（安全性の説明責任）

土木構造物の安全性については、多くの場合安全性の根拠を説明できる工学的解析法が存在します。貯留構造物の安定計算には、はダムの設計理論が多く採用されていますが、ダムや擁壁は、合力着点点が構造物底面幅の中央 1/3 の範囲に入っていればその構造物は転倒しないと断言できる理論があって、それに準拠して貯留構造物の安全性を主張していますが、遮水工の構造や浸出液の貯留量等については、依然あやふやな背景説明しか出来ていないのが現状であると思います。こうした施設の不確実性を何とか払拭する事は出来ないのでしょうか？

併せて「絶対安全か」という市民の問いかけにも、疑問を感じています。

（以下は、私のひとり言と思って下さい）

飛行機は毎年のように何機かが事故を起こし人命が失われていますが、日航や全日空に乗るとき、「この飛行機は絶対に落ちない」と航空会社に確認している人は居ないし、バスや電車に乗ると同様に平気で切符を買って乗っています。乗客は自分が乗った飛行機は決して落ちないと思っているのでしょうか。

航空機と最終処分場の安全性には、何故これほど大きな乖離があるのでしょうか。

4. 最終処分場は地震災害時の緊急対応施設

田中先生が学会誌に書いておられた趣旨と同じです。

出来れば、先生から何等かのコメントがあれば有り難いと思っています。

（以 上）